第１部パネル　分科会4　継続／大阪5、37／神奈川31

目指す地域像の策定及び実現のための工程表

提言

目指す地域像と工程表は一体的なもの。住民と目指す地域像を共有し、必要な活動を住民がみずから創出できるような戦略を立て、その実施計画を工程表として作成し、住民ニーズに応える活動の創出につなげていこう。

登壇者

【進行役】　岡野　貴代　（公財）さわやか福祉財団
戸澤　真澄氏　大館市第１層ＳＣ
武井　恵亮氏　高崎市第１層ＳＣ
岡村　美花氏　武蔵村山市南部地域包括支援センター長
藤江　晃子氏　武蔵村山市第１層ＳＣ
小林　陽一氏　南アルプス市第２層ＳＣ

■ **寄せられた声から**

- 取り組みの工程を具体的に確認でき、自分たちの取り組みも共通するところがあり、行き詰まりを感じていても、このまま地道に進んでいこうとか、もう少しテンポよく協議の機会を作れないかなど、反省する点や励まされる点があり、参考になりました。「仕掛ける」ことの大切さを職員で共有できたらと思います。住民主体を理由に職員が住民を見守っているだけに陥っているケースもあり、職員啓発も課題です。

議事要旨　岡野 貴代

目指す地域像と工程表は一体的に考えるべきものとして、生活支援体制整備事業における先進自治体より、目指す地域像と工程表を具体的にご紹介いただきました。登壇自治体に共通していることは、「住民の主体的な動きを支援する」ことを基本軸とし、目指す地域像で関係者の方向性を同じくし、柔軟に住民の動きに対応できるようさまざまな戦略を考えていることでした。

南アルプス市は、住民や協議体の状況として、無関心期、関心期、準備期、実行期、維持期という段階があると考え、それぞれの段階ごとに生まれる課題に対する支援として情報交換会や研修会等を準備し、住民が必要に応じて参加できる仕組みをとり、その段階ごとの状況と対応を工程表としてまとめていました。

大館市は、目指す地域像のイメージ図に具体的に必要な活動を書き出し、住民と共有しています。住民説明会や、庁内連携をスケジュール化した工程表とともに、課題と必要な取り組みの一覧を作成し、進捗状況を関係者で共有しながら進めています。また、地域福祉計画と目指すところは同じであると考え、予算上では区分けしながらも、生活支援体制整備事業における取組みをその計画に含めていることも特徴といえます。

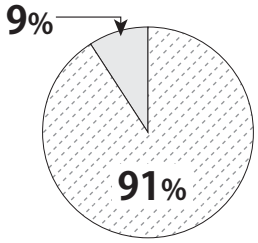
高崎市は、住民主体で活動を進めてきた大都市モデルです。第１層ＳＣを２名委嘱し、行政担当者４名（うち今回登壇の武井氏は第１層ＳＣも兼務）、社協の連絡担当者１名が、１か月に２度の打ち合わせを行い、関係者が連携を取りながら進めています。目指す地域像は２層圏域ごとに作成し、その実現に向けて必要な支援を関係者で話し合い１つの計画表に落とし込むことで、関係者の意識共有と行動の見える化に大きな役割を果たしています。また、高崎市では、年度末に計画に対する「自己評価」をつけていることも特徴です。行政・ＳＣがともに話し合い進捗に対する評価をし、課題への対策を次の年度計画につなげ、ＰＤＣＡをしっかりと回しながら事業を進めています。

武蔵村山市は、目指す地域像のスローガンをポスターにして市内250か所以上に掲示し住民意識を醸成し、住民や多様な地域資源を巻き込みながら活動を創出しています。モデル地区から展開し、協議体を立ち上げ、住民に働きかけ、住民による活動創出に至るまでの流れを工程表としてまとめ、他の地区はモデル地区の工程表を参考にしてアレンジして進めるモデルの横展開が特徴といえます。また、目指す地域像の実現のために必要な活動として、住民が歩いていける距離に住民主体のサロンを創出することを考え、サロン創出のリーダーとなる「お互いさまリーダー」養成講座を実施しており、修了者を活動に結び付けるための講座終了後の工程表についてもご披露いただきました。

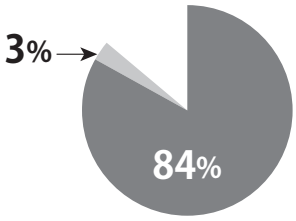
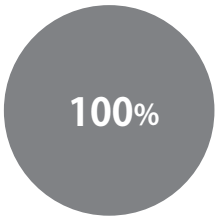
「住民主体」は「住民まかせ」ではありません。住民主体の助け合い活動を広げていくためには、広げていくなりのしかけが必要となってきます。当分科会の登壇者の実例には、そのヒントがちりばめられていたのではないでしょうか。

アンケートの結果　参加者概数：101名　回答者数：34名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方